ごあいさつ
―過去から未来へ、自然の博物館とともに―

鈴　木　敏　昭

4月1日から「自然の博物館」に参りました館長の鈴木です。本間前館長同様、よろしくお願い申し上げます。

赴任初日のことですが、少し早めに家を出たせいか、時間的に余裕があったので、長瀞駅から博物館まで歩いてみました。岩畳を眺め、川音と鳥の声に耳を預けながら桜並木の下をゆっくり歩く気分は、さすが長瀞！と感嘆せざるを得ませんでした。

約15分で博物館に到着。庭前にて「日本地質学発祥の地」の記念碑を確認。

この記念碑は、埼玉及び日本の地質学研究の発展に大きく貢献したこの地を歴史的に高く評価するとともに、その精神の継承発展を祈念して平成5年に埼玉県により設置されたものです。記念碑の石材は、もちろん地元長瀞産の結晶片岩。そこには「彩の国」埼玉と地域のイメージアップへの願いが込められていたことは言うまでもありません。「長瀞」という名が、日本国内のみならず、世界においてもさらに認知度が高まることを期待したいものです。

ところで、なぜ長瀞が「日本地質学発祥の地」と言われるようになったのでしょうか。「自然の博物館」の歩みとも関わることなので、少し振り返ってみたいと思います。

今から132年前の明治10年、東京大学に地質学科が開設され、近代地質学が初めて日本に導入されました。初代教授はナウマン博士。博士は早速翌年に秩父巡検を実施しております。以来長瀞一帯は、我が国地質学上の重要な研究拠点として、多くの地質学者を育ててまいりました。

こうして、長瀞は、いつしか日本地質学発祥の地と言われるようになったようです。

大正15年には汎太平洋学術会議が秩父巡検を敢行したことで、「長瀞」の名が研究者を通じて世界に発信されました。

そうした中、大正10年「鑛物植物標本陳列所」が当地に開設されています。これは我が国における自然系博物館のさきがけとなりました。その後、陳列所は戦後の昭和24年「秩父自然科学博物館」へと衣替えをします。研究者や多くの地質学徒がフィールド調査の合間に訪れる地学教育のメッカがこうして出来上がってきたのでした。

そして昭和56年、埼玉県は「秩父自然科学博物館」の一部を継承しつつ、地質と生物（動物・植物）を網羅的に取り扱う県内唯一の自然系総合博物館として「埼玉県立自然史博物館」をオープンさせました。その後、県立博物館施設の再編整備を経て、平成18年より、今日見る「自然の博物館」となったわけです。

こうした長い歴史的背景を持った「自然の博物館」ですが、皆様と共に歩む姿勢は一貫しております。ちなみに当館のミッションは次のとおりです。

～「過去から未来へ埼玉3億年の旅、そして自然と人との共生」をテーマに、自然資料を収集・保管し、調査研究して将来へ継承し、情報を発信します。また、学習を支援して、自然に関心を持つ人材を育成し、様々な人との連携・交流を進めます。～

さて、長々と書いてまいりましたので、皆様の中には、すでにお気づきの方もおられることと思われますが、「自然の博物館」にとって今年は、前身の「秩父自然科学博物館」の開設からちょうど60年目（還暦）に当たります。また、「鑛物植物標本陳列所」の開設からは何と88年目（米寿）という目出度くも大きな節目の年でもあるのです。当博物館が長瀞という地に存在する意味、役割をもう一度振り返り、皆様に愛される博物館であり続けるためにはどうしたらいいのか。未来への曙光は、職員ひとりひとりの自覚と行動が鍵となるはずです。県民の皆様の御意見も頂戴できれば幸いです。

「自然の博物館」は、より専門性をみがき、より親しみやすく、安心・安全な博物館運営をして参りますので、今後とも、皆様の御支援・御協力をよろしくお願い申し上げます。

（すずき　としあき・館長）